
寂しさウイルス

いちは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しさウイルス

【Nコード】

N8516I

【作者名】

いちは

【あらすじ】

寂しさウイルスから逃れシェルターに生きる僕の話。

シエルターの天井照明が薄明かりになった。

「もう、そんな時間かぁ」

隣でユミかつぶやいた。

「夕飯にしよう」

リーダーのシンイチが言った。

僕は、配られたカロリーメイトを頬張った。

ボソボソとした感触で喉が渴いた。

今日の配給分の水は残り少ない。

僕はほんの少しだけの水で、口を湿らせた。

薄暗がりの中、離れて座っている誰かのアクビの音がした。

それにつられたかのように、ユミもアクビして、

僕もなんだかアクビをしたくなった。

アクビも、うつるのだろうか。

僕は横になった。

毛布を頭からかぶったユミの背中を見つめた。

僕たちがシエルターに入って、今日でどれくらいになるだろうか。

外の世界はどうなっているのだろうか。

同じようなシエルターで生活している人たちがいるのだろうか。

それとも、もう、世界なんてものは、なくなっているのだろうか。

致命的ウイルスとまで言われた寂しさウイルスは、

すでに人類を滅ぼしてしまったのだろうか。

もう、僕たちは、このシエルターから出られないのかもしれない。

そんなことを考えていたら、いつの間にか眠り込んでいた。

夢、だろうか。

僕は教室にいた。

どうやら昼休みのようで、同級生たちが弁当を食べている。皆、それぞれグループを作っているけれど、僕は独りで食べていた。

教室の隅の方、ユミも独りで食べていた。

ユミとは、このシエルターで知り合ったのだから、これが夢だということがはつきり分かった。

僕は独りで弁当を食べていたけれど、別に何とも感じなかった。

ユミも、淡々とした表情で弁当を食べている。

誰も僕に話しかけないし、僕も誰かと話す気にはならない。

声をかけられたら答えるし、必要があれば僕から声をかける。

ただ、誰も僕とは喋らず、僕も喋る必要がないだけ。

きつと、ユミも同じなのだろう。

ふとユミが座っていた机に目を向けると、ユミはいなくなっていた。

教室の中を見渡してみても、ユミの姿はない。

グループを作っている皆は、笑顔ではしゃいでいた。

彼らの笑い声を聞きながら、改めて教室中を探してみた。

ユミはどこにもいなかった。

まあ、どうでもいいや。

頭ではそう思っているはずなのに、僕は立ち上がっていた。

そこで、目が覚めた。

ほんの少し離れた場所に、毛布にくるまったユミの背中があった。

なんとなく、僕はため息が出た。

薄暗闇の中、誰かがクシャミをした。

音に反応したのか、ユミは少しビクリとし、それから寝返りをうつた。

僕の方を向いたユミの目は、開いていた。

ユミと目が合った。

ユミの瞳は濡れていた。

「ゴ」「メ」「ン」

ユミが唇を動かした。

僕は、小さく首を振った。

僕とユミ。

どちらが最初に感染したのか、それは分からない。

僕からユミへうつったのか、ユミから僕にうつったのか。

今、ただ一つ確実なことは、

僕もユミも、寂しさを発症してしまったということだ。

だから僕たちは、なるべく早く、このシェルターから出て行かなければならない。

他の人たちに、寂しさを感染させる前に。

不治の病、寂しさに感染してしまった僕とユミは、

これから、外の世界で生きていかなければならない。

感染性の寂しさウイルスは、僕たち人類の眉をひそめさせ、
涙腺を緩ませ、ため息をつかせ、胸を締め付けるのだ。

僕たちがシェルターにこもってまで、逃げ続けてきたウイルス。
絶対に感染しないよう避けてきた寂しさ。

だけど、なぜだろう。

生まれて初めての、苦しいはずの寂しさなのに、

今まででの人生で一番満たされているような、この気持ち。

僕は、ユミの手を握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516i/>

寂しさウイルス

2011年7月16日15時32分発行